

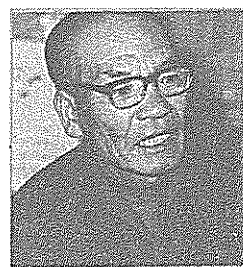
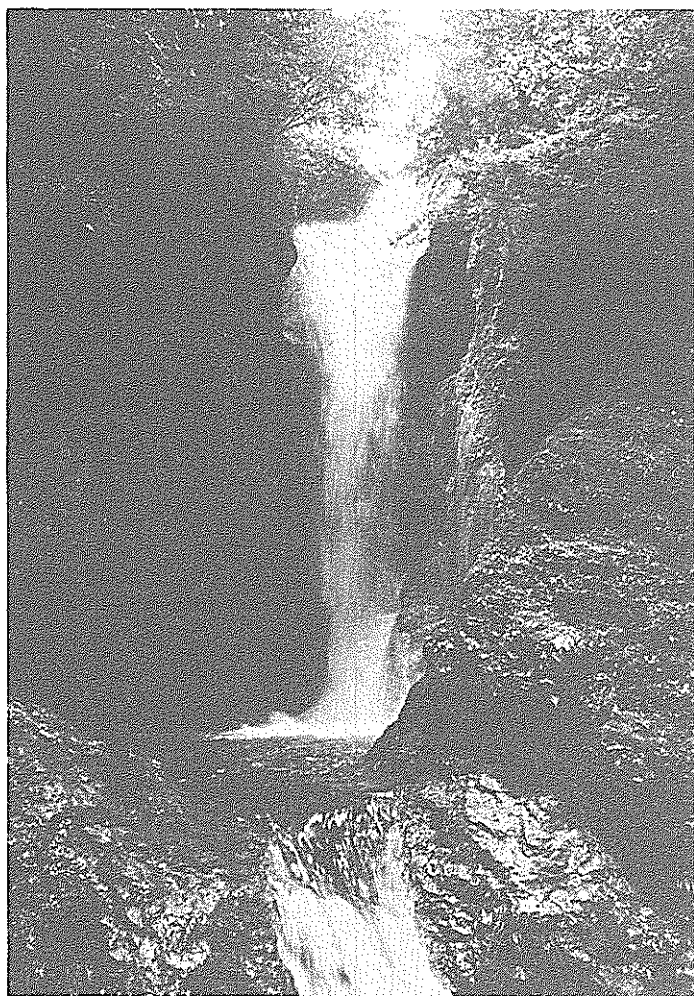
文化財をたずねて②

《瀬戸の滝》

地主神社（桑の川の鳥居杉）から約二き、桑の川の上流にある。地、秋の紅葉は特別です。

雑木が茂って、昼もおうす暗い。鳥居杉と瀬戸の滝のセットの八岩の間から、高さ二〇き、水量の豊かな滝が流れている。

雨乞いの祈願に、酒のはいつた分、桑の川から徒歩で約三十分ほど、斗槽を流すと、からになって浮力どかる。



門田政利さん

瀬戸の滝についての
門田政利さん（笠の川）の話

○昔、八月の暑い時、百姓さんが肥料にするための草を刈っていました。

した。昼になったので、涼しい滝のそばに降りて行きました。

おかずを持ってきた、片面が焼けた小鯛に「性根がありやあ、この測の神になれ」と言って離しますと、不思議なことに泳いで、測に入ったといいます。これが瀬戸神社の神様だということです。

ここは雨ごいの神様で、田井や天行寺、久礼田などからのお礼まわりののぼりが残っています。

○久礼田の人が「瀬戸神社は、片面焼けた小鯛が神様だから、猫を入れたら雨が降るだろう」と考えて、わらにつつんで投げ込んだそうです。そうすると、すぐに曇って雷が鳴り始め、豪雨になったということです。

部落の人々が「それはいかん」ということで、急いで猫を引き上げると、カラッと晴れたそうです。猫を投げ込んだ人は、帰り道の

井の沢で腹が痛くなり、帰って間もなく亡くなったという事を聞いています。

○私が神社総代をしていたころです。麦刈る季節になったものの、雨が半月も続いて刈れなく、困っていました。もう辛抱できないというところになり、総代の私が「いつ日和になるか」のクジを引きますと「明日」と出ました。部落の人々は、回復しやうにない空を見上げて苦笑いをしていましたが、翌日の午後からはみごとに晴れ上がり、ご利益をいただきました。マ話を聞きした門田さんは、永らく桑の川に在住され、神社総代を十七歳から三十年間もつとめました。

